

分類の理論と応用に関する研究会会報

JAPAN CLASSIFICATION SOCIETY NEWS

No.2



1984. 4. 25

発行 分類の理論と応用に関する研究会 Tel.446-1501
〒106 港区南麻布4-6-7 統計数理研究所兼付 / 銀行口座一三菱銀行広尾支店普通0134368
振込口座一東京8-83686番

会報2号に寄せて 幹事長 矢島 敬二

昨年6月の発起人会からやがて1年がたとうとしている。その間、12月には第1回のシンポジウムを開くことができた。最低限の形を整えたというところであろうか。

今年の冬は例年なくきびしく、暖冬の地東京に二十数回の降雪があり、3月の平均気温は例年よりも3度低く、雪国東京とさえいわれたが、それでも春は確実にやって来た。大学や企業は4月が年度始めて、新しい参加者を迎えて、古い人を送ったり、気持を新しくする機会にもなる。

及ばずながら、本研究会も会計年度は4月1日から始まるということで新しい年度を迎えたわけだが、本会報にもあるように本年度は7月と12月にそれぞれシンポジウムと研究会を開催することを計画した。積極的な参加のほどをお願いしたい。

7月予定の第2回のシンポジウムでは、言語を含めた社会現象の解析における分類の問題を取り組むということで担当の上田尚一幹事に御努力いただいた。欧米の同種の会合ではなかなか実現しない討論の場となるのではないかと思われる。十分に機会を御利用いただくよう期待するものである。

昨年のシンポジウム案内発送のさいに各種の御意見を求めたところ、貴重な見解をいただいた。本号にもその結果が紹介される予定であるが、お礼を申しあげるとともに参考にしていただきたい。そのなかに、ワークショップの開催という御意見があった。これも幹事会で積極的にとりあげようということになっている。しかし、この場合は十分

な準備が必要である。テーマをうまく選び、複眼的な観点から問題を整理しておくことが重要となる。これについては、シンポジウム、研究会の場においても討論をしていくのがよいのではないかと思われる。

話はまとまりがない次第であるが、前回の林会長の会報発刊に当っての一文のなかに、学際的活動についての一節がある。学際的な集りは国によってかなり異なるような気がする。気がすると述べたのは、十分に自国のことと他国のことと知らないからに他ならないが、一分野の研究者集団でもいろいろな歴史的、地理的、人脈的な制約のもとで、きわだった特色があるのが実状である。したがってなおさら、学際的な会合の場には、さまざまな偶然性、制約が現われる。わが研究会が学際的な活動にふみだしているときに、それが十分に学際的であるかどうかについて答えるのはむずかしい。しかし、そのような十分さ、完全さは本来なかなか得がたいものではないかという気がする。少なくとも会員の幅の広さは、十分ではないとしても、なにか分類の理論の一般化の活動を発展させるに十分である、と思われる。

このような見方が楽観的にすぎるという見解も多くあろうが、医学や社会科学、さらには工学、農学といった分野における分類の理論や方法について討議を進めることは、きわめて有意義であるし、欧米諸国でも簡単にできることではないようと思われる所以である。

たしかに日本の土壤は専門家を育てるよりも高

度の一般人を育てるという傾向はある。高度の専門家を育てることが今後重要であるという認識が正しいものであることは認めるけれども領域の異なる専門家の集まりが不毛であるとは考えにくい。あるいは、学際的な分野での成果をあげるのに、

日本は適しているのではないかとも考えられる。

分類の結果の表示に利用できる各種の情報機器や手法も広がりを見せつつある。この分野までを含めて今後の活動が行なわれることを期待してやまない。

(日本科学技術研修所)

総会およびシンポジウム開催のお知らせ —

昭和59年度総会ならびに第2回シンポジウムを来る7月24日(火)の13時から統計数理研究所にて開催いたします。総会次第、シンポジウムの詳しい内容については、本号と同封の総会案内、シンポジウム案内をご覧下さい。

幹事会記録

第3回幹事会議事録

日 時 昭和58年11月7日(月) 18時から

場 所 統計数理研究所談話室

出席者 矢島敬二；上田尚一、大隅昇、
加留部清、高橋伊久夫、宮原英夫

1. 分類研究会の国際連合体(IFCS)についての対応策を検討し、その結果、現在までの経過を会報1号を通して、会長、幹事長から会員へ説明することになった(→会報1号参照)。
2. 第1回シンポジウム開催の企画案について上田幹事から説明があり、これについて検討した。その結果、会報1号と共に開催案内を会員宛に発送すること、講演者へお願い状等を送付すること、などを確認した。
3. 会報1号の掲載内容、デザイン等について意見の調整、確認を図った。
4. 会員へのその他の連絡事項、発送資料等の確認を行った。

第4回幹事会議事録

日 時 昭和59年3月3日(土) 11時～13時

場 所 統計数理研究所談話室

出席者 矢島敬二；上田尚一、大隅昇、
加留部清、高橋伊久夫、松田芳郎、
宮原英夫

1. 昭和58年度の研究会活動の確認

58年度の研究会活動として、発起人会・総会の開催、第1回シンポジウムの開催、会報1号の発行、その他幹事会活動等について確認した。

2. 昭和59年度事業計画の検討

59年度の事業計画として、(1)第1回研究報告会(12月中旬を予定)、(2)会報2、3号の発行、(3)分類問題に対する会員アンケートの実施、等について、その日程や内容を検討した。

諸外国の分類研究活動組織について

既に会報1号でお知らせした IFCS (International Federation of Classification Societies) の設立検討委員会 (IFCS Founding Council) の組織化に関連した事項を会員の皆様にお知らせいたします。

まず IFCS 設立検討委員会は、今のところ米国の Dr. J.D. Carroll (ベル研究所) を中心にして、IFCS の規約等をめぐって各国間の意見を調整中です。また英国(ケンブリッジ)で1985年7月2～5日に開催予定の Psychometric Society と CSNA (北米分類学会) 、 CS-UKB (イギリス分類学会) との Joint-meeting の折に、各国の委員が集まって、さらに調整を図る予定です。

次に、今までに IFCS に参加している各国の分類研究関連組織を挙げておきます(括弧内は連絡代表者名です)。

- Classification Society of North America
(CSNA : P. Arabie, Univ. of Illinois)
- Classification Society, United Kingdom
(CS-UKB : J. Gower, Rothamsted Experimental Station)
- Gesellschaft für Klassifikation

(GfKl : H.H. Bock, Univ. of Aachen)

- Japan Classification Society
(JCS : C. Hayashi, I.S.M.)
- Società Italiana di Statistica
(SIS : N. Lauro, Univ. di Napoli)
(*)イタリア統計学会の一部会として活動
- Société Francophone de Classification
(SFC : M. Jambu, C.N.E.T.)

なお、この他にソ連邦（会長、 Aivastian）、ユーゴスラビアにも組織ができたとのことです。

第1回シンポジウム報告

日 時 昭和58年12月15日(土)13時～17時

場 所 統計数理研究所新館講義室

出席者 40名

初めに、林知己夫会長から“我々の目指す分類の概念は、以下に報告のある矢島・大隅の分類理論の操作の枠よりもさらに広いものと考えたい”との意見があった。たとえば“情報の視覚化という操作などは、多次元情報の低次元への集約化と関連させて、きわめて重要である”などの話があった。続いて、プログラムに移って、あわせて4件の発表があった。

「分類理論の概要—分類理論(1)—」として、矢島氏（日科技研）は、木村氏による植物学の分類体系を引用し、ここで全形質体系と名づけられた数値分類・数量分類に相当すると、報告を位置づけた。さらに、近年の計算機の進歩にあわせてこの研究分野の発展も目ざましいものがあることが指摘され、一つの試みとして、文献（論文・単行本）に出現するキーワードを用いた文献分類にもとづいた分類研究の動向の報告があった。

続いて、分類理論(2)として、大隅氏（統数研）から、分類技法の総括的なレビューがあった。まず、“分類”をどの範囲で考えるかについて、用語や歴史の流れに従って位置づけがなされ、次に数理的側面から代表的な技法の問題点や、特徴の説明があった。また、時間的制約の中で、意味のある分類技法や、重要な著作物についてのリストの

紹介があった。

次は、分類技法の「リモートセンシングでの応用」と題して、藤村貞夫氏（東大）から、画像解析における分類法の方法論と適用例の紹介があった。リモートセンシングで扱うデータの特徴として、（時間・空間的に）多次元であって、しかも大量であることがあり、しかも、多くのノイズを含んでいること、従って分類法としては、高速処理が可能であってしかも、ロバストであることが重要であることが強調された。これらを満足する具体的な方法として、二分木分類法や、適応的領域分割法などの説明があり、実例がスライドで示された。

最後の報告は、塩見正衛氏（草地試験場）による、「生物学・農学におけるクラスター分析の活用」と題して、生物学・農学における数値分類法の2つの適用例が紹介された。第1の例は、植物分類に関連した話題で、オオクサキビの自生系統の分類例が示された。いくつかの階層的手法を適用して、データの分析を行い、栽培適性の比較に有効であったことが示された。第2は群集の類似性の研究として、国内に存在する野草地の植生の類似性への適用例が述べられた。この際、植生生育尺度の作成上の工夫が重要であること、などの報告があった。ここでも階層的手法を用いて、国内の草地がいくつかの群に分けられることが示された。さらに、クラスター分析の利用上の問題として、観測特性のコード化の方法、類似度の作り方などが、利用者の問題に対する仮説検証に際して、十分議論されねばならないことが指摘された。

また、大友 篤氏（宇都宮大）による「地域分類における諸問題」は同氏の都合により、発表が取りやめになった。（予稿集には要旨の掲載がある。）

（文責：高橋伊久夫）

* * *

なお、シンポジウムの発表に続いて、林会長から、分類諸学会の国際連合体（IFCS）設立に関連した活動の現状説明があり、若干の質疑応答があった。現在のところ、各国間の調整が、若干複雑な事態にあること、とくに、IFCSの規約作成、会誌の発行をめぐっての意見調整が難航している

ことが報告された。また、各国の学会又は研究会をIFCSの組織体としてどのように構成するかについて討論した。とくに、現在のところ、CSNA（北米分類学会）を本部とし、その他の国学会・研究会は支部扱いとする案と、各国の運営はそれぞれ独自の規約のもとに各国で進め、これとは別にIFCSの共通の規約のもとに各国が同等にIFCSの運営を進めるという案とがあり、これらのどちらを支持してゆくかという点についての早急な討議要請が、会長から示された。これについて、若干の質疑応答ののち、我々としては、支部ではなく、あくまで各国の連合体として組織化を進めることを望ましい、との結論を得た。

● シンポジウム企画に関するアンケート の結果について

先般、シンポジウム企画についてのアンケートを、会員の皆様にお送りしました。その結果がまとまりましたのでお知らせします。

(1) 希望するテーマについて

テーマとしては、分類分野での分類操作の具体的利用法、最近のクラスター分析の話題等を、希望している会員が多く、その他に、因子分析等の話題を希望している者もいた。

(2) 開催希望時期と回数

希望する開催数としては、年に2回程度、時期としては、6月、11月を希望する意見が多かった。

(3) その他

他の諸学会とは異なる新しい方式（たとえば、ワークショップ方式など）を考えてほしいという意見や、関西地区での開催を希望する声もあった。

*
* * * *

事務局から

● 会費納入のお願い

会員の皆様で、入会金、昭和58年度会費を未納の方は、指定の郵便振替口座または銀行口座（会報の見出しに出ています）に入金願います。（既に会報1号と共にお送りした、振替用紙をご利用いただぐと便利です。）

● New Journal 発刊のお知らせ

CSNA（北米分類学会）から、次の雑誌が発刊されることになりました。CSNAの会員に対しては年間約18ドル（郵送料は別に必要）で配布されるとのことです。関心のある方は、出版社（Springer日本支社）か事務局までお問い合わせ下さい。

雑誌名：Journal of Classification (季刊)
chief-editor : Phipps Arabie)

発行：Classification Society of North America

出版社：Springer Verlag

(*) 1984年1月から第1巻、1号として発行される。

(**) Springer日本支社：(tel) 818-0861～3,
文京区本郷3-37-3, イースタン・ブック
サービス(株)内。

● アンケートのお願い

会員の皆様の分類研究に対する関心、ご意見をうかがい、今後の研究会活動の参考にしたいと考えております。つきましては、アンケートの葉書を本号とともににお送りいたしますので、お手数ですがご意見をお寄せ下さい。